（論　文）

六義園の歴史
―柳澤吉保時代を中心に―

宮川葉子

キーワード

六義園　柳澤吉保　柳澤吉里　楽只堂年録　六義園記　松陰日記

はじめに

六義園については、前稿二本[注一]で述べたので詳細は繰り返さないが、本稿の論述にあたり必要最低限の知識のみ振り返っておく。

吉保は六義園造園にあたり紀州和歌の浦を写し取り、和歌を守護する三柱の神[注二]の一つ玉津嶋明神を勧請して建てられた京都五条松原の新玉津嶋社を、さらに江戸六義園に勧請、七本の松を植えてご神体とし「新玉松」と名付けた。そこには「六義園新玉松奉納和歌百首」を奉納するなど、柳澤一家の和歌上達を願っての玉津嶋明神信仰を窺い得た[注三]。それだけではない。園内には和歌や漢籍の知識に支えられた八十八箇所の名所を定め、うち十二境八景は霊元院[注四]の勅撰という栄誉も担ったのであった。

それらを踏まえ、本稿は六義園の変遷、六義園の活用、「新玉松」の朱塗り鳥居建立の経緯、新たな庭園設営などを、吉保時代を中心に考察したものである。その意味で前稿の拾遺とも言える論考である。

【注】

一、宮川葉子「柳沢吉保と六義園―「六義園図巻」と『松陰日記』を中心に―」（淑徳大学国際コミュニケーション学会機関誌「国際経営・文化研究」第七巻第二号〈二〇〇三年三月〉）、宮川葉子「六義園―その初期の姿をめぐって―」（「国際経営・文化研究」第八巻第一号〈二〇〇三年十一月〉）。

二、住吉明神・玉津嶋明神・柿本人麿としたり、衣通姫・柿本人麿・山部赤人とするなど諸説ある。

三、吉保時代の公用日記「楽只堂年録」第百四十六巻、宝永元年（一七〇四）六月二十三日の条には、「今日、駒籠の別業六義園の新玉松、久護山に和哥を奉納す」とあり、新玉松と久護山（六義園八十八景にはふくまれないが、吉保が園の東北にもうけた毘沙門堂で、六義園の守護神と目していた。後述）に各々百首和歌が奉納されたのが知られる（注一引用の宮川葉子「六義園―その初期の姿をめぐって―」に翻刻済み）。「六義園新玉松奉納和哥百首」は、春二十首、夏十五首、秋二十首、冬十五首、恋二十首、雑十首からなり、詠者は、吉保の家族と家臣、幕府歌学方の北村季吟、京都賀茂神社の権祢宜鴨祐之を加えた五十五名であった。とくに雑十首における吉保の「松」題の歌、「幾千世もひかりをそへよ七本の玉松が枝にみがくことの葉」からは、和歌のさらなる上達祈念が充分に読み取れる。同様に雑の九首目、染子（私注・吉保継嗣吉里の生母で、吉保側室飯塚染子）の「神祇」題、「七本の玉松が枝の神がきやいくちよかけてみがく言の葉」や、十首目の、吉里の「祝」題、「神垣やひさしく御代をてらすらん此玉松のたえぬひかりに」にも同様の思いが看取できる。さらに染子と吉里の歌には、「神垣」と見えるように、新玉松の七本の松には「神垣」が廻らされてあり、朱塗りの鳥居まで設営されていたのであった（この点は「六義園絵巻」によっても確認できる）。

四、第一一二代天皇。後水尾天皇皇子。名は識仁。生没一六五四～一七三二、在位一六六三～一六八七。吉保は町子の実父正親町公通を介して霊元院に和歌添削を願い、幾度も指導を得ている。六義園十二境八景の勅撰もその一環と言える。また添削などへの吉保からの礼物に対し、院から硯や薫物、扇、公家の寄合書きによる歌書などの下賜品もあった（「楽只堂年録」「松陰日記」等）。

（一）元禄十五年七月までの六義園

吉保時代の公用日記「楽只堂年録」（柳沢文庫蔵。全二二九巻。楽只堂は吉保の号、以下「年録」と略）にたどれる六義園の変遷について見ておく。もっとも六義園の名は後の命名で、初期はもっぱら「駒込の山里」「駒込の別墅」「駒込の下屋敷」などと呼ばれていたが、本稿では「六義園」と統一して呼ぶ。

六義園は、元禄八年（一六九五）四月二十一日の「年録」に、「城北駒込村にて、松平加賀守綱紀が上げ屋敷を拝領す。坪数、四万八千百弐拾壱坪なり」（三十巻・二六オ）とあるのが始発。翌二十二日には早速前田家から受け取った（三十巻・二六ウ）。以後、吉保は自らの手で和歌の精神に則った設計・造園を手がけ、元禄十五年（一七〇二）七月五日に完成を見るのであるが、それまでにも変遷があった。

その第一が「年録」元禄十年（一六九七）七月二十八日の条。当年は、一月十八日に綱吉（五十二歳）が吉保の四十賀を祝い、継嗣吉里（十一歳）も独立へ向け別棟を与えられるなど、吉保の将来も次世代の成長もが期待できる状況になりつつあった。「年録」には、「駒込の下屋敷の地つゞきにて、長さ七十五間、横二十間の地を拝領し、今日、請取る」（四十八巻・三一ウ）とあり、千五百坪の追加拝領が確認できる。「地つゞき」からだけでは、どの方角を指すのか定かではないが、ともかくこれによって、二年四箇月前の四月に拝領の「四万八千百弐拾壱坪」は、四万九千六百弐拾壱坪に増大したのである。

次が元禄十一年（一六九八）八月二十三日。この年は、吉保を総奉行に二月から東叡山寛永寺の根本中堂の普請がなされ、成功裏に任務を終えた吉保への論功行賞として、七月には左近少将に補任され大老格に到る。そうした中で迎えた八月二十三日とは、完成した根本中堂の安鎮・地鎮の修法が大々的に行われた日であった。「年録」には「駒込の下屋敷の作事、今日成就す」（五十六巻・三九オ）とある。元禄八年四月二十一日の時点で、既に「松平加賀守綱紀が上げ屋敷」と呼んでいるから、それなりの「屋敷」はあったと想定されるが、吉保は独自に「下屋敷の作事」をなしていたのである。改築、増築の類か、はたまた侍小屋などの充足か、ともあれそれが成就したのであった。

三番目が元禄十三年（一七〇〇）三月廿九日。吉保（四十三歳）は、五月下旬の実姉珠光院玉窓妙眉大姉逝去による愁傷がきっかけで病臥。七月末まで平常勤務をなせない状況となるのであるが、土地の追加拝領はその二箇月前にあたる。「年録」には、「駒籠の下屋敷の地つゞきにて、麟

祥院が上げ屋敷、長さ百四十八間、広さ四間の地を拝領し、今日請取」（七十二巻・一四オ～一四ウ）とある。

麟祥院[注五]は三代将軍家光の乳母(めのと)春日局[注六]が自ら名乗った法名。家光は綱吉の父。そうした関係もあって綱吉は吉保に土地を下賜したか。いずれにせよ綱吉の吉保寵愛の一端と見てよいのであろう。さて「長さ百四十八間、広さ四間」は、五百九十二坪にあたるがかなり細長い土地である。麟祥院の敷地の一部を細長く削っての拝領を覗わせる。これにより六義園は、総計五万二百十三坪となった。

なお当年八月二十二日、病後の癒しも兼ね、吉保は六義園に赴き一日のんびりと過ごす。そして続く八月二十七日、北村季吟に古今伝受したのであった。結果的に、それまでの滅私奉公に疲れ切った吉保が生き方を振り返り、愛好する文芸の世界に一歩も二歩も近づく機会であったとも言える。六義園の作事の実際はすべて家臣まかせであったのが、一日のんびりと遊ぶなどはそれを窺わせる。

麟祥院の敷地の一部を得た元禄十三年（一七〇〇）、十一月十三日の「年録」には、「駒込の下屋鋪の侍小屋より出火して、小屋二十軒斗焼失す。幸に隣宅に及ばず」（七十七巻・九ウ）とある。六義園内の侍小屋火災の記事である。一軒に何人が住まっていたかは定かではないが、侍達の多くは家族持ちであったと思われ、平均八人程度は同居していたか。ということは、「小屋二十軒斗」で焼け出された人数は百五、六十人程になる。しかも全侍小屋が焼失したのではなさそうで、焼け残った小屋にも侍達が住まっており、相当な人数が六義園の経営に携わっていたと推測される。考えてみれば、五万坪以上の土地と、それに付随する下屋敷の管理・運営には、多大な人手が必須のはずであった。人件費の凄まじさも見え隠れするというものである。そこへ起きた火災。復興には時間も費用も要したと思われるが「年録」に関連記事はない。

翌元禄十四年（一七〇一）四月二十五日には、綱吉生母桂昌院が、王子稲荷等歴訪の帰途に六義園を訪問。吉保は野趣を尽くした設営でもてなす。園の完成までにはまだ一年半近くある時期ながら、完成度は完成時に大差なかったと知られる。[注七]

桂昌院の六義園訪問の二日後にあたる四月二十七日の条に、「今日、安通が実母、駒込の下屋敷にて、大奥の女中、右衛門佐の局、大典侍の局など数人を振舞ふ。贈り物品々なり」（八十二巻・二六ウ～二七オ）とある。「安通が実母」は、吉保側室の正親町(おおぎまち)町子。安通(やすみち)は町子腹の吉保二男である。「右衛門佐(えもんのすけ)の局」は町子の実母。詳細は宮川葉子『柳沢家の古典学（上）―『松陰日記』―』[注八]に譲るが、当時大奥総取締の任にあった右衛門佐の局の招きで京都から関東に下り吉保の側室になった町子。生涯独身が掟(おきて)故、町子の実父正親町公通(きんみち)と離縁して勤める大奥総取締の

任を労い、吉保は町子とその実母の対面の機会を六義園に設営してやっていたのである。

【注】

五、東京都文京区にある臨済宗妙心寺派の寺。山号は天澤山。通称枳殻寺。寛永元年（一六二四）、春日局（法名麟祥院）の建立。開山は謂川周瀏。報恩山天澤寺と称したが、春日局の没後、現在の寺号に改称された。彼女の墓所がある。

六、実父斎藤内蔵助利三、生母稲葉右京進某女。稲葉重通に養われ、その息男正成の室となり、正勝、正定、正利等を産むが後に離婚。徳川三代将軍家光の乳母となり、家光が将軍継嗣になるに功績があった。彼女の伝記を述べるゆとりはないが、寛永十一年（一六三四）正月、長子正勝に死別。愁傷のあまり自らも法名をつけて麟祥院と号し、寛永元年（一六二三）に湯嶋に建立していた一宇、報恩山天澤寺を、天澤山麟祥院と改めた。ここでいう麟祥院は、寺としてのそれであろうと思われる。

七、宮川葉子『柳沢家の古典学（上）―『松陰日記』―』（平成十九年一月・新典社）。

八、注七同書「解説」の「二、正親町町子の背景」（三三～四七頁）を参照願いたい。

（二）元禄十五年七月以降の六義園

元禄十五年（一七〇二）七月五日になった。この年は、三月に二万石の加増を得た吉保の禄高は、都合十一万二千三十石に到っていたが、四月六日、神田橋の上屋敷が炎上。綱吉の御成御殿をはじめ、吉保が長年収集して来た古典籍や家宝の多くが灰燼に帰した。家族は中屋敷、下屋敷に分散して避難生活を送る。[注九] 程なく上屋敷の再建開始。夜を昼に継ぐ突貫工事は効を奏し、五月九日には再建が成った。その約二箇月後が六義園完成の七月五日にあたる。

「年録」には、「駒込の別墅、営構成就す。地の広さ三万歩。築山、泉水等を設けて野趣を尽せり」（一〇二巻・八ウ～九オ）とある。「歩」は「坪」と同等の田地の単位であるから、三万坪の地に、築山や泉水を設けて野趣溢れる庭にしたというのである。六義園の地は増大され、「総計五万二百十三坪」となっていたから、三万坪を差し引いた残り二万二百坪余は、一つは下屋敷の建物群、二つは侍小屋など、三つは田畑（後述）

として使われたと思しい。三万坪の庭園に、その七掛けほどの広大な面積の建物群や田畑が併存する、それが六義園の完成直後の規模であった。六義園のその後を追って見よう。

同年八月十三日の「年録」には、「駒込の下屋鋪経営成就して、今日はじめて遊ぶ」（一〇三巻・七オ）とある。庭園完成後、一箇月以上経った時点でのことで、この間に下屋鋪の経営も順次完成度を高めていたらしい。「遊ぶ」がどの程度を意味するのかは不明ながら、吉保の満足な表情が窺える。

その二箇月あまり後の十月十一日、吉保は再び六義園を訪れた。「年録」には、

今日、駒込の別墅に遊びて、様々の名所を設く。園を六義園といひ、館を六義館と云。射場を観徳場と云。馬場を千里場と云。毘沙門山を久護山と云。凡て八十八境。記を作りて其あらましを述ぶ（一〇八巻・二〇ウ～二一オ。傍点類宮川、以下同じ）。

とある。この日、吉保はこの地を「六義園」と命名。「凡て八十八境」の名所（などころ）も定めた。「記を作りて」の「記」は、「八十八境」の詳細を載せる「六義園記」[注一〇]のことで、それはまさに当該「年録」の一〇八巻に収載されているのである（以下該本を「六義園記」と呼ぶ）。

なお六義園に初めて遊んだ八月十三日から、当該十月十一日までには、上屋敷復興の磨き上げも同時になされていた。閏八月九日には、霊元院の指揮下、法親王三人を含む堂上方六十二人の書写にかかる『三代集』を賜る[注一一]。炎上で多くの古典籍を失い悲嘆していた吉保への見舞であった。仲介は右衛門佐局。吉保側室町子の生母であるのは既に述べた。また九月十四日には吉保邸内の御成御殿も完成。それを待ち構えるように、同月二十一日には綱吉の御成を得た。

元禄十六年（一七〇三）三月二日のこと。「年録」には、「吉保が駒籠の下屋敷の内にて久護山といへる額を、公辨親王遊ばして下さる」（一一四巻・五オ～五ウ）とある。「久護山（ひさもりやま）」は所謂八十八境ではない員外の境地であるが、「六義園記」に「毘沙門とひさもりと、五音相通なり。播磨をはりまとよみ、鴈をかりとよむ類ひなり。毘沙門は北方多聞として、須弥の巳寅とはいへば、北方を司るゆへ、鞍馬も京より巳のかたなり。花

相応の土地にて六義の園を長く久しく守り給ふべき霊地なり」とあるように、六義園の守り神が宿る霊地と位置づけられていた。染井門の内側にあたるが、現在は申し訳程度の小高い盛り土が残るばかりで毘沙門を忍ばせるものは存在しない。

公辨親王[注一二]染筆の久護山の懸額からは、毘沙門天を祀る堂宇を予測させるが、果たして「六義園記」に付載された「六義園図」（淡彩の絵図面。宮川葉子「六義園―その初期の姿をめぐって―」〈注一同論文〉の巻末に付載）の東北隅には、「久護山」と「毘沙門堂」の表記が見える。額はここに懸けられたのである。因みに公辨親王は五歳で毘沙門堂に入り、四十七歳で薨去し（正徳五年〈一七一五〉）毘沙門堂に葬られたように、毘沙門堂との縁は深い。そうしたことあっての染筆依頼であったのかもしれない。

公辨親王が染筆した三日後にあたる元禄十六年（一七〇三）三月五日の「年録」には、「駒籠の下屋鋪の東隣にて、堀左京亮直利[注一三]が屋敷を拝領す」（一一四巻・一〇オ）とある。そもそも六義園は北側半分以上（三万坪）が庭園、南側に家屋群があった。「六義園図」（前掲）によると、庭園の東は、千里場（せんりば）と呼ばれる馬場が南北に通り、外界と一線を画したようになっているから、その東隣を拝領しても、それを取り込み庭園を拡張させるのは無理だと判断される。ということは家屋群の「東隣」の意で、家屋群を充実させ得る土地が増大したということであったのか。改めて考えたい。

右記事の二日後、即ち三月七日の「年録」に、「一昨日拝領せる駒籠の下屋敷の東隣、五千九百九坪の地を、今日受取る。西の方七十壱間三尺、東の方七十二間三尺、南の方八十二間四尺、北の方八十壱間三尺なり」（一一四巻・一三ウ）とあって、堀直利の屋敷は、若干東西に長い土地であったとわかる。六義園の総計は、五万二百十三坪になっていたから、この度の拝領分を合わせると、五万六千百二十二坪になる。元禄八年（一六九五）四月に前田綱紀の屋敷を拝領した時は、四万八千百弐拾壱坪。以後、元禄十年（一六九七）七月二十八日、元禄十三年三月二十九日及び今回と三回の増地を経て八千坪も増大していたのである。この後、同月十三日には、綱吉息女で紀伊徳川綱教へ嫁した鶴姫、続いて水戸家へ嫁ぐ予定の綱吉養女八重姫が各々来園、四月四日には、吉保側室正親町町子の来園が確認できる。[注一四]

さて論はいささか遡るが、堀直利の屋敷を拝領した二週間後の三月二十一日は、公辨親王の六義園来訪が予定されていた。そのためであったのか、「年録」に「藤代峠の下、水分石の上、久護山に腰掛をまふけ、池中に舩をうかべ、野趣を尽せり」（一一六巻・一二オ）とある。

藤代峠は園内の中央部に位置する園内最高の小山で、「六義園記」には、「紀国にあり。四方を見おろす景地にて、無双の景々とかや。哥には「藤代の三坂」と読めり」とある。前述したように、六義園は和歌の浦を写しとり、和歌の精神を存分に摂取して設計されていた。その和歌の浦に鎮座する玉津嶋社、それを勧請した京都松原五条の新玉津嶋社、さらにそれを勧請した六義園の「新玉松」と、吉保の中では、玉津嶋への崇敬が一筋に連なっているのであるから、和歌の浦を見下ろす藤代峠は是非とも模さなくてはならないものであったはずなのである。

水分石は、園の南西部にある水遊びを楽しめる納涼の地。「六義園記」には、「水を三つにわけたる石なり。東山殿の図[注一五]にも水分石といふ石あり」とある。そして久護山には公辨親王染筆の扁額が掛けられていたはず。それら三箇所に腰掛を設営したというのである。庭内回遊に疲れた折の休息に供する意図であったのであろう。それのみならず「池中に舩をうかべ」てもあった。和歌の浦に見立てた広い池は、船遊びの場でもあったのである。

【注】

九、宮川葉子「柳沢吉保の下屋敷―茅町屋鋪と浜の屋鋪を中心に―」（『国際経営・文化研究』第十四巻第一号・二〇〇九年十一月）、宮川葉子「柳沢吉保の上屋敷―神田橋屋敷と常盤橋屋敷を中心に―」（『国際経営・文化研究』第十四巻第二号・二〇一〇年三月）に詳細を述べた。

一〇、宮川葉子「六義園―その初期の姿をめぐって―」（注一同論文）に翻刻してある。

一一、宮川葉子「右ヱ門佐宛書状―柳沢家の罹災をめぐって―」（『国際経営・文化研究』第九巻第二号・二〇〇五年三月）。

一二、後西院皇子。一品。俗名秀憲。元禄三年（一六九〇）三月、江戸に下り、輪王寺宮となり、同年六月には天台座主にも任じられた。この他にも東叡山主、日光山主も兼帯する「三山管領宮」として活躍。柳澤家とも懇意で、吉保の家族罹病の折には加持祈祷にも心を砕き、吉保邸、六義園、待乳山の別邸への来訪などもあった（宮川葉子『柳沢家の古典学（上）―『松陰日記』―』〈注七同書〉解説（二）四六頁等参照）。

一三、父堀直吉、母堀直次女。万治元年生まれであるから吉保と同年。天和年間には越後光長の事件で越後国に赴き、糸魚川を守護。後に奏者番、寺社奉行を兼務。正徳元年（一七一一）致仕。享保元年（一七一六）卒去。享年五十九歳。室は松平丹波守光永女（『寛政重修諸家譜』巻第七百六十六）。

一四、「年録」に、「今日、駒籠の下屋敷へ、安通が実母行て遊ぶ」（一一七巻・五ウ）とある。

一五、東山殿は足利七代将軍義政。「東山殿の図」は慈照寺銀閣の庭を描いた絵図面類を意味するものと思われるが、現在の銀閣の庭に水分石を捜し出していない。

（三）宝永元年二月までの六義園

元禄十六年（一七〇三）四月二十二日の「年録」には、「今日、一位様へ、駒籠の菜園の前栽物壱籠、鮮鯛壱折を進上す」（一一七巻・一七オ）とある。六義園の「菜園」に生った「前栽物」（青物、野菜）を桂昌院（綱吉生母）に贈った記事である。「菜園」に関しては、巻子本「六義園記」[注一六]の最終項（一〇二番目に該当）に、「楽秋圃　菜園なり。江万里が詩に、「欲知太守楽其楽。楽在田園歓笑中」（記事内の「　」は宮川、以下同じ）として登場しているが、「年録」収載本「六義園記」には見えない境地。「年録」収載本と巻子本「六義園記」の間には、成立にかかる時間的なずれがあり、その間に名所・境地が増大、あるいは統合されるという現象が見られ、[注一七]「楽秋圃」もその類と判断される。ただ、当該元禄十六年四月二十二日に、桂昌院に生りものの献上が可能であったのも事実で、そうなると、菜園は初期の八十八境には数えられなかったものの、あるいは前年七月の六義園完成時から機能していたのかもしれないと考えられてくる。本稿「（一）元禄十五年七月までの六義園」の侍小屋失火の記事において、かなりな人手が六義園の経営・管理に投入されていたらしいのを見た。そうした彼らに、ある程度の自給自足を促せる田畑が用意されていたと見ることはできまいか。総計五万二百十三坪の土地から庭園部分の三万坪を差し引いた二万二百坪余が、下屋敷の建物群、侍小屋など、そして田畑ではなかったかと推定しておいた所以である。

因みに当該生り物の描写は、『松陰日記』最終巻「月花」の次の記事を彷彿させる。「月花」は、隠退して妻妾達と六義園に移り住んだ吉保が、浮き世の義理に惑わされず、和歌三昧の余生を過ごす中で擱筆される巻であるが、その中に、

園の方を西に離れて、竹の林広〳〵と打回らしつゝ、此方彼方畑うち均（な）らし、時〴〵の生り物絶えず。山城の戸畑にはあらぬ瓜作りの翁共、さる方にいとよく扱ふ。色〳〵の果物あるを、女原騒動き歩（おんなばらそうと）きて争ひ取り、「これおだいに参らせよ」と言へば、虫の付きたるをむつかしと思ひたる気配もおかし。楽秋圃（らくしゅうほ）とかや言ふめれば、秋の田の実又いとこちたく栄へたり（宮川葉子『柳沢家の古典学（上）―『松陰日記』―』（前

掲、一〇七六頁）

とある。「楽秋圃」は吉保隠退以後も、六義園に住まう人々に生り物を提供し続けていたのである。

元禄十六年（一七〇三）十月朔日になった。「年録」には、「五の丸様、鶴姫君様へ、駒籠の下屋敷の前栽の花壱桶（中略）を進上す」（一二八巻・二オ～二ウ）とある。「前栽の花」は、居住区に作られてあった庭で採取したものらしい。

ところで柳沢文庫に蔵される水木家旧蔵文書（以下水木文書と略）の中に、六義園の全景を写し取った淡彩の絵図があり、それによると、六義園には侍小屋や作業場が建つ地域と屋敷地との境に、かなり広い花壇が二箇所見られ【絵図Ⅰ】、それは栽培農家の花畑かと見まがうほどの規模である。「楽秋圃」のごとく名所（などころ）に数えられる存在ではないながら、六義園内にはこうして専門に花を育てる空間も存していたのである。吉保やその家族は、和歌の浦を写し取った庭園で自然の移ろいを堪能するのみならず、花壇で育てた花々を切り取って生け花を楽しんでいたものと考えるのである。

年号は宝永となった。宝永元年（一七〇四）二月十日の「年録」に、「去年拝領せる駒籠の下屋敷の東の方、五千九百坪の地を、西南隣り、右京大夫輝貞が下屋敷に換ふ。その地は、六千七百坪余なり」（一三九巻・二八ウ～二九オ）の記事がある。

「去年拝領せる駒籠の下屋敷の東の方、五千九百坪の地」とは、元禄十六年（一七〇三）三月五日に拝領し（一一四巻・一〇オ）、翌々日に受け取った「堀左京亮直利が屋敷」の「五千九百九坪の地」（一一四巻・一三ウ）にほかならない（本稿「（二）元禄十五年七月以降の六義園」）。その地を「西南隣り、右京大夫輝貞が下屋敷」と交換の話が持ち上がり、同年三月十三日に、「先月、右京大夫輝貞と換たる下屋敷を、今日、請取る」（一四〇巻・三三オ～三三ウ）とあって土地交換は完了する。

吉保の「五千九百坪の地」と、右京大夫輝貞の「六千七百坪余」を単純に比較すれば、吉保の方が約八百坪の増地。以前は五万六千百二十二坪であった六義園は約八百坪を得て、総面積五万七千七百二十二坪になったのである。但し、増地の度に全てが六義園の中に取り込まれ庭園の拡大に使われたと考えるのは早計であろう。堀直利の屋敷を庭園に取り込むには馬場が邪魔していた。そしてこの度、西南隣りの右京大夫輝

貞の下屋敷と容易く交換できたのも、堀直利の屋敷地は手つかずで保管されていたからこそではなかったか。

では右京大夫輝貞とは誰か。吉保の女婿に他ならない。そもそも柳澤家は男児に恵まれず、養子・養女を入れて家の存続を図って来た。それは吉保の代でも例外ではない。とはいえ適当な親族の男児を養子とし、家督を継がせればこと足りるかと言えばそうではない。もし養子縁組後に側室などに男児が誕生しようものなら、養子は廃嫡の憂き目に遇う。このあたりは吉保の義兄にも起きた悲しい事実であるが、詳細は宮川葉子『柳沢家の古典学（上）―『松陰日記』―』（前掲）に譲る。

松平輝貞は、吉保養女市子（栄子・永子とも）の女婿となった。市子の実父は折井淡路守正辰。折井正利の息男であった。折井氏は柳澤氏や吉保正室定子の実家曽雌氏同様、武田信玄の家臣団として活躍した武川衆。一方吉保、定子夫妻は婚姻数年経っても子に恵まれない。これは吉保の父安忠に男児が授からず、吉保を得るまでに経験した困難を髣髴させる。そこで吉保は定子側の親族の女子幾人かを養女にし、そこに聟を迎える構図を考えた。継嗣無き家筋は断絶という憂き目に遇いたくない、当時の武家の必死な気持ちがそこにはあったのである。

結果として、吉保、定子夫妻は四人の女子を養女に入れ、市子が輝貞と婚姻したのであった。吉保の女婿として、また綱吉の寵臣として、輝貞は活躍するのであるが、[注一八]当該土地の交換は、岳父吉保対女婿輝貞で内々に進められていたとも考えられるそれであった。

【注】

一六、「六義園記」と称されるものには二種類ある。一本は、既に本稿でも幾度か引用して来た「楽只堂年録」第一〇八巻付載のそれ。もう一本は、柳沢文庫蔵の巻子仕立ての同名のもの。詳細は宮川葉子「六義園―その初期の姿をめぐって―」（注一同論文）の第三節で詳細に報告、翻刻もなしてあるので、参照ねがいたい。

一七、注一同論文に詳述した。

一八、吉保と側室正親町町子の間に誕生した二男経隆と三男時睦が、後に前者は越後黒川藩祖、後者は越後三日市藩祖と、いずれも柳澤家とは無関係な越後に所領を得ることができたところには、義兄としての松平右京大夫輝貞の活躍があったことなど、宮川葉子「正親町町子腹の二男児―その転封に果たした松平右京大夫輝貞の役割―」（「国際経営・文化研究」第十三巻第一号・二〇〇八年十一月）を参照願いたい。

（四）宝永六年六月十八日までの六義園

宝永元年（一七〇四）五月八日の「年録」には、「駒籠の下屋敷の毘沙門堂を復構す。今日、霊雲寺比丘戒琛請じて、遷座の法を執行はしむ」（一四四巻・八オ）とある。「毘沙門堂」は公辨親王染筆の額が懸かる久護山。「遷座の法」が執り行われていることから、一時的に毘沙門を他所に遷し修復、この日、新堂宇への遷座がなされたらしい。「復構」の理由は記録に見えないが、前年（元禄十六年〈一七〇三〉十一月二十二日、関東は大地震に見舞われており、その折の倒壊・半潰などが原因であったかと推測される。因みに「霊雲寺比丘戒琛」とは、吉保が私的に帰依、綱吉の延命祈祷を始め自家の安泰も含め、自邸の増築、改築などへの祈祷を依頼していた霊雲寺（現在文京区・御茶ノ水近く）の僧侶である。続く七月二十九日の「年録」に六義園増地に関する次の記事が載る。

吉保が深川の屋敷の内にて七千拾四坪余の地に、土井周防守利益が駒込の屋鋪の内にて、八千二百八拾坪余と、外道六百九十坪余の地とを引替賜はるべき事を願ひ奉りて、今日、願ひ叶たるとの仰事有。同じ地続きにて、右京大夫輝貞が先頃返し上げたる千百五十七坪の地をも拝領す（一四八巻・二〇オ～二〇ウ）。

元禄十六年（一七〇三）三月十三日に、六義園は「堀左京亮直利が屋敷」と「西南隣り、右京大夫輝貞が下屋敷」とを交換、総面積五万七千七百二十二坪になっていた。今回は吉保の深川屋敷内[注一九]の「七千拾四坪余」と、土井利益[注二〇]の駒込屋敷内の「八千二百拾坪余」及び「外道六百九十坪余」の合計八千九百坪を交換。その上、右京大夫輝貞返上の地続き「千百五十七坪」も拝領。総計六万七千七百七十九坪余に到ったことになる。土井利益の駒込屋敷の全貌は未詳ながら、吉保の下屋敷の中では唯一隅田川の川向こうにあたる使い勝手の悪い深川屋敷との交換を望んだところに、六義園の地続きで、しかも右京大夫輝貞の下屋敷とも隣接する位置関係にあったものと想定したい。この受け取りは、宝永元年八月九日のこと[注二一]であったが、今回の一万坪余の獲得は、下屋敷拡張のためではなかったかと思われるのである。その証左が次の記事である。土井利益の駒込屋敷「八千二百拾坪余」を請け取った翌日にあたる八月十日の「年録」には早速のごとく、

駒籠の下屋敷の普請をするによりて、今日、霊雲寺比丘戒琛を請じて、安鎮の法を修学せしむ。また、去来、大地震の後なるによりて、地鎮の法をも執行はしむ。是によりて、比丘戒琛へ銀五枚（以下略）」（一四九巻・八ウ～九オ）

とある。傍線箇所から大地震の経験を踏まえた地鎮法執行も知られ、五月の毘沙門復構も大地震と無関係ではなかろうと改めて推測されるのでもある。ともあれ約一万坪の増地は並大抵ではない。以前の総面積の一割五分にも相当する広大な面積。その地を下屋敷拡張のためのみに使ったのであろうか。結論的に言うなら、増地の一部は新たな造園のために供されたものと考えるのであるが、これについては本稿「（六）壺中天」で改めて論じる。

宝永元年も十月になった。その二十一日、「日光御門跡公辨親王へ、駒籠の新墾田の新米五俵、但壱升入、同所前栽の蕎麦一箱を進上す」（一五一巻・三四ウ）とあり、六義園の「新墾田」で刈り入れた新米と蕎麦を公辨親王へ献上した記事が見える。

六義園の名所は、初期の八十八景に加え順次増設され、それらは巻子本「六義園記」にのみ見られること、その一つが「楽秋圃」と呼ばれる菜園であったことは本稿「（三）宝永元年二月までの六義園」で述べた通りである。ここの「新墾田」も同様の増設された名所なのである。ただし、巻子本「六義園記」にも名のみ見え、内容の記載がないのであるが、書いて字の通り新たに開墾された田畑であったのは容易に想像が付く。そこでは米も蕎麦もが栽培されていたのである。

二年近く経過した宝永三年（一七〇六）三月廿四日、「駒籠の下屋鋪の家臣等が長屋焼亡す。是によりて、右京大夫輝貞、井上河内守正岑へ使者をつかはして、そのよしを告ぐ」（一八三巻・三四オ）とある。元禄十三年（一七〇〇）十一月十三日、まだ完成していない六義園の侍小屋から出火、小屋二十軒ほどが焼失したことは既に述べた（本稿「（一）元禄十五年七月までの六義園」）。火災には神経質であったはずでも、こうして再度長屋が焼亡しているのである。

さらに二年ほど経過した宝永五年（一七〇八）三月から四月に到る一連の「年録」を見ておきたい。

三月朔日、「黄檗山の悦峯和尚、参府せらるゝによりて、吉保、駒込の下屋鋪へ招きて逗留せしむ」（二一七巻・三ウ～四オ）、翌二日には、「退出

の時に、駒籠の下屋鋪へ到りて、悦峰和尚と筆談す」（二一七巻・五オ～五ウ）とある。さらに同二十日にも「駒込の下屋敷へ到りて、悦峰和尚と筆談す」（二一七巻・二〇オ）、二十三日には、「悦峰和尚、今日、駒籠の下屋鋪にて、鰈口の法を執行はる」（二五オ～二六オ）と続き、四月十二日の条には、「駒込の下屋鋪に到りて、悦峰和尚と議して、穏之山を龍華山と、霊台寺を永慶寺と改む」（二一八巻・八ウ）と記録されている。

悦峰和尚は、宇治黄檗山萬福寺八世。中国浙江省杭州西湖の生まれ。宝永四年（一七〇七）九月、初めて江戸へ下向、吉保と対面し仏教談義を交わした。[注二二] 今回の下向は二回目にあたる。この折吉保は悦峰を六義園に長期逗留させ、筆談をもって仏教談義をなした。結果、四月十二日の条に知られるように、吉保の菩提寺を龍華山永慶寺と改名するに到るのでもある。さらに付け加えるなら、綱吉薨去をうけ六義園に隠退、出家剃髪し保山元養と名乗った吉保の戒師は悦峰であった。因みに三月から四月に到る長期逗留の間に、悦峰は六義園の妹背山に「放鶴亭」の経営を勧めたと思しい。[注二三] 初期には八十八箇所であった名所は、こうした経緯で増大することもあったのである。

柳澤家にとって大転換が突然やってきた。宝永六年（一七〇九）一月十日のことである。前年暮れから体調のすぐれなかった綱吉は、年頭行事も継嗣家宣に託し休養をとっていたが痘瘡と判明。全快の酒湯まで使ったが、一月九日に急変。翌日早朝、六十四歳の生涯を閉じた。

吉保は即刻隠居を願うが、新将軍の治世が正式に帆を揚げるまで見届けるよう家宣に慰留される。命令に応じたものの、吉保は隠退後の準備を着々と進める。その一端が「年録」四月十三日に、「駒込の別墅の居館を広む。今日、釿初なり」（二一七巻・三三ウ）とある記事。吉保は六義園で余生を送る予定にしていた。居館拡大は、妻妾達と始める新たな生活のためであった。そして六月十八日、「吉保、并妻、今日、駒籠の下屋敷のやかたへ移徙す」（二一九巻・一〇二オ～一〇二ウ）とあって、吉保と妻定子がまずは六義園へ移徙したのを知る。因みに「吉保、并妻、今日、駒籠の下屋敷のやかたへ移徙す」の一文は、「楽只堂年録」の再末尾の記事である。

【注】

一九、深川屋敷の詳細については、宮川葉子「柳沢吉保の下屋敷―茅町屋鋪と浜の屋鋪を中心に―」（注九同論文）第二節「（二）深川の屋鋪と芝の屋鋪」を参照されたい。

二〇、土井周防守利益については、宮川葉子「柳沢吉保の下屋敷―茅町屋鋪と浜の屋鋪を中心に―」（注九同論文）第二節「（一）深川の下屋鋪」の注一を参照された

い。

二一、「年録」宝永元年（一七〇四）八月九日の条に、「先頃、吉保が深川の屋鋪の内と引替にせし土井周防守利益が駒籠の屋敷の内、八千二百八十坪余の地を、今日請とる」（一四九巻・八才）とあって確認できる。

二二、このあたり、宮川葉子「六義園―その初期の姿をめぐって―」（注一同論文）第四節（五）を参照されたい。

二三、宮川葉子「六義園―その初期の姿をめぐって―」（注一同論文）において、巻子本「六義園記」の「放鶴亭」の説明に、「宋の林和靖か隠たりし孤山に放鶴亭有。此嶋（私注・妹背山と呼ばれる和歌の浦に見立てた六義園中央部の池に浮かぶ島）孤山に似たりとて、「此亭を構へよ」と西湖悦峯子のたまひしなり」とあり、悦峰の提起で放鶴亭が新たに建てられたのが知られることを論じた。

（五）新玉松（にいたままつ）

六義園の名所の一つ「新玉松」は、柳澤家の和歌上達を願う吉保にとって、六義園の守護神毘沙門天を祀る「久護山」と互角（ごかく）な、神聖かつ大切な場所であった。宝永元年（一七〇四）六月二十三日の「年録」に、「今日駒籠の別業六義園の新玉松久護山に和哥を奉納す」とあるのがそれを語る。「新玉松」は、「爰（ここ）もあつまの新玉津嶋なれは、七本の松をかくもやいふへき。玉津嶋姫のみかけるひかりもいよ〳〵あらたならん事を祝して」（年録本「六義園記」）、「新玉津嶋を勧請して、松を七本植たり」（巻子本「六義園記」）と説かれ、ご神体（しんたい）は七本の松であった。

一方、柳沢文庫蔵「六義園絵巻上巻」[注二四]には「新玉松」及び、朱塗りの鳥居と神垣（かんがき）が描かれる。その鳥居に掛けられた額字の原本と思しい吉保自筆の一枚をかつて拙稿に掲載したことがあった。[注二五]

では鳥居や額字はいつから存在したのであろう。見てきたように六義園の完成は、元禄十五年（一七〇二）七月五日であった。その初期から鳥居はあったのか。ここで「年録」の元禄十六年（一七〇三）七月二十八日の記事に目を転じたい。六義園が完成して丸一年後にあたる。

吉里が実母、今日、鳥居を六義園の新玉松の前にたつ。吉保、新玉松の三字を大文字に書て是に掛く。額の裡に、元禄十六年癸未七月吉

旦園主源朝臣敬書と記し、羽林次将と、松平吉保との二印を用ゆ（一二〇巻・三九ウ～四〇オ）。

この記事こそが、朱の鳥居と吉保の額字について語る。しかも、鳥居は「吉里が実母」、即ち吉保側室、飯塚染子の奉納であったのだ。吉保正室曽雌定子に婚姻後数年経っても子供が授からないのを案じた柳澤家では、吉保生母了本院の侍女染子を側室に入れた。染子は吉保との間に五人の男女児を産むが四人が夭折、結果吉里のみが生き残り継嗣として柳澤家を支えて行くことになった。

一方鳥居に掛ける額字は吉保染筆。陽刻「羽林次将」も陰刻「松平吉保」も「年録」の記事と一致、旧豊田家文書の「新玉松」に他ならない。額そのものが存在しない現在、確認できないのが残念であるが、額の裏には、「元禄十六年癸未[注二六]七月吉旦園主源朝臣敬書」とあったはずなのである。「七月吉旦敬書」を「年録」と合わせ見る時、七月二十八日の吉旦、即ちよき日に吉保が慎んで染筆したものと知られるのである。

染子には、本稿注三に揚げたように「六義園新玉松奉納和歌百首」の夏十五首での「橘」題、雑十首での「神祇」題の詠歌はもとより、「染子歌集」と仮題（柳沢文庫仮目録での命名）される吉保との詠歌贈答、吉保の信仰告白『勅賜護法常應録』付載の「故紙録」、その他『松陰日記』の随所に見られる柳澤家内の歌会での詠歌や散文に類推できるように多くの文芸事績が残る。同じく吉保側室で、和歌の家の末流として歌才を発揮した正親町町子との実力差はともあれ、染子の歌才は後々に吉里が生涯二万首以上の和歌を詠む才能に受け継がれたものと思う。勿論吉保の歌才も半分は継承しているのは申すまでもないのであるが。そして、元禄十六年七月二十八日に、「新玉松」の前に朱の鳥居を献上するところに、当時、柳澤家内における染子の歌才は、少なくとも吉保の認めるところであったのも見逃してはなるまい。

【注】

二四、当該絵巻は破損状態が酷く、現在閲覧停止となっている。以前拙稿「六義園―その初期の姿をめぐって―」（注一同論文）の巻末に掲載した写真も、当時の柳沢文庫学芸員故西村幸信氏撮影・提供のものであった。

二五、注一同論文。「新玉松」と墨書された堂々たる額字は、現在大和郡山市社会教育課の保管にかかる旧豊田家文書。撮影者は柳沢文庫元職員故米田弘義氏。氏より額字の由来等のご教示を得た上で、写真一葉も贈与を賜った。縦五四・五センチ、横三五・八センチの鳥の子紙に書かれ、左下に「羽林次将」（朱の陽刻）と

「松平吉保」（朱の陰刻）の角印を持つ。

二六、「元禄十六年癸未」の「癸未」は「みづのとのひつじ」、元禄十六年（一七〇三）に間違いない。

（六）壺中天

巻子本「六義園記」には、増大したと考えられる名所の一つに「壺中天」があり、「李白が詩に、「寥廓壺中天」といへり。境界の各相なる事をいふ」とある。一方『松陰日記』（前掲）巻三十「月花」十三段には次の記述がある。

まことや玉川の夕涼みこそ、いとゞ憂き世の濁りなき心地すれ。流るゝ水に差し掛けたる東屋一つ、いとさゝやかにて、反り橋を度りつゝ、行き通ふ。水に臨みて酒呑みたるなどもおかし。欄干に寄りて見れば、此方彼方通り行く水のさすがに浅きものから、水底清く澄み優りて細石も数へつべし。御前の山水とは程を隔てゝ何となき木の下道を、そこはかと分け来と思ふに、こゝもとに来りて俄かにはた、月日の光広く異なる世界に到れらん心地して、誰も〳〵手を打ちて驚く。昔仙人の、壺の中に天地を入れけん例に準へつゝ、「壺中天」と言ふ額あり。流れをもとゝ構へたる所なめれば、さしも広らかに、そこら水遠く流れたる景色言はん方なし（一〇七五頁）。

これによればつぎのような光景が浮かぶ。玉川と名付けられた川での夕涼みのすばらしさ。その流れに懸けられた、反り橋を渡って行く小さな東屋。水に臨むそこでの飲酒は風情満点。東屋の欄干に寄りかかれば、此方彼方と流れゆく川筋。浅く清く澄み通っているため、水底の細石も数えられそうである。（和歌の浦を写した）庭園に見られる山水とは若干離れた何でもない樹木の中を分け入ったかと思うと俄に開ける空間。月日の光さえ広大に輝く別世界に到った気持ちに誰もが手をたたく。昔、壺中へ天地を閉じ込めた仙人の伝説に準じ、東屋には「壺中天」の額が懸けてある。川の流れを専ら楽しむ意図で造られた場所。それこそ広々と遠くまで流れ行く景色は言いようもない。

初期にはなかった名所「壺中天」は巻子本「六義園記」に姿を見せ、右『松陰日記』にも「昔仙人の、壺の中に天地を入れけん例に準へ

つゝ、「壺中天」と言ふ額あり」と登場しているのである。ここから、現在の六義園には見られない東屋、玉川等が存在していたことが知られる。

その位置を特定するのは難しいのであるが、水木文書の「六義園図」を参考にして考察してみたい。当該文書は柳沢文庫現蔵の、未装幀の淡彩絵図一枚。本稿末尾に全貌【絵図Ⅰ】と「壺中天」に関連深いと思われる箇所の拡大部分【絵図Ⅱ】を掲載したので参照願いたい。それは六義園の庭園部分を南に外れた所に、建物群に割り込むよう配され、「御泉水」と書かれた中嶋を持つ簡略な絵図。北側の小高い山の中腹には四角の建物があり、泉水には三箇所に橋がかかる。残りの部分には小道が芝を廻り、その東側は建物群へと連なっている。

ここで、巻子本「六義園記」に再度目を転じたい。そこには年録本「六義園記」には見られなかった名所として、「甘露味堂」「小玉川」「壺中天」「架空梯」の四つが連続して登場する。この四つと水木家旧蔵絵図とを丹念に比較してみよう【絵図Ⅱ】。

まず、「小玉川」。「六義園記」に「此園の、玉川の流をひきてかけたる処なれは也」とあるのから類推すると、道幅三間半とある道が西側へ九十度折れ曲がる東北角に白い四角が示されていて、そこが玉川の流れの引き入れ口と思しいのである。そこから水路は東側へ向かって「藪」「土手」「堀幅四間半」「土手」と直角に貫き、さらに道を越えて内陸部まで引かれている。その脇には「上水樋」とあり、玉川からの入水を管理する水門であったとわかる。これこそが「玉川の流れをひき」いれる水道であったのである。その水道は一端地下に潜り、庭内に姿を見せる時は、絵図の西側中央部北西よりの、細い流れの発端となる仕組みであったようである。それは程なく幅のある流れとなり、中央部の小嶋の両端を洗うように「御泉水」となって北側へと太い水脈を保ちつつ流れ登ってゆく。

次に「壺中天」。中央部の小嶋に渡る橋は一箇所のみ。おそらくこれを渡った嶋中に「壺中天」の額が掛かる四阿（あずまや）があったものと考えられる。そして嶋にわたる「反り橋（そりはし）」こそが「架空梯」であったのであろう。さらに、北側の小高い山の中腹に建つのが「甘露味堂」ではなかったか。

では水木家旧蔵文書に見える、こうした新たな庭はいつ出来上がったのであろう。『松陰日記』巻三十「月花」は、隠退後の吉保の和歌三昧の日常を描く巻であるのは述べた通り。しかも、吉保が隠退する宝永六年六月までに六義園の庭園部分の改築の記事は見られず、隠退以後の造作のように思われる。

本稿（三）において、約一万坪の増地の一部は、新たな造園のために供されたのではないかと予測を示しておいた。新たな庭が居住部分に食い込むように配されていることに類推し、吉保は庭の拡張と居住区の充足を図ろうと意図していたのは間違いあるまい。ただ、それがいつのことかは特定できない。[注二七]

ただ本稿（四）で、六義園の総計は六万七千七百七十九坪余に到ったと述べたが、水木文書には、「惣坪数四万九千弐拾坪六合三夕」とあり、最大規模時と比較すると一万九千七百五十八坪四夕の減少となっている。その差の約二万坪近い土地は如何様になったのか。もっとも絵図を丹念に見ると、「楽秋圃」や「新墾田」が見えない。『松陰日記』最終巻によれば、「楽秋圃」は「園丶の方を西に離れて」あったのであり、『松陰日記』が擱筆される時点までは存在していたはずである。以後、水木文書の絵図が描かれるまでの間に、「楽秋圃」や「新墾田」を含む二万坪近くが柳澤家の所有を離れた――、その後を伝えるのが水木文書の絵図なのではあるまいか。

【注】

二七、森　守氏著『六義園』（財団法人東京都公園協会発行・一九八一年五月第一版、二〇〇四年三月第四版発行、第四版による）には、「六義園の完成をみた二年後の宝永元年（一七〇四）に吉保は、またまた園の西側地続きに約九千坪（二万九千七百平方米）の土地を賜り、造園に着手し、彼が側用人の職を辞した翌年宝永七年（一七一〇）に完成をみている。この庭は、今までの華々しい「和歌の庭」から一変して、阿弥陀堂（甘露味堂）を庭の北側に、その南には池を掘り、その池中に「四阿」（あずまや）を建て、それに反橋を架け、池の周囲には樹木を植えた、大変簡素な庭であった。特に池中の四阿には「壺中天」（こちゅうあん）と名付け、将軍綱吉亡きあとを偲び、自らの隠生を心静かに過ごす、浄土思想の別世界の庭を造ったのである。彼の日記「楽只堂年録」第百九二巻（宝永三年十月）に「穏斎記」を記して、その創意を述べている。また、柳沢家所蔵の「六義園全図」にも、ここの部分が描かれている」（第四章、八九頁）とある。本稿で辿ってきたのと類似の記事ではあるが、「宝永七年（一七一〇）に完成をみている」とされる根拠になる史料の提示がなく確認が取れない。吉保継嗣吉里の公用日記「福寿堂年録」の宝永七年にかかる箇所にも、六義園の新たな造園の記事は見られない。

むすび

六義園は元禄八年（一六九五）、前田綱紀の上地を得て以後、吉保は足かけ八年かけて和歌の精神を生かした庭を造園。幾たびかの増地も経て、宝永六年（一七〇九）六月以降は、正徳四年（一七一四）十一月二日に五十七歳の生涯を閉じるまでの終の棲家となった。しかしそれ以前は、悦峯和尚に会うため、一箇月のうちに数度足を運ぶなどというのは例外的で、年に数えるほどしか園を楽しむゆとりはなかった吉保。隠退後は和歌三昧の日々を送りたかったことは『松陰日記』に十二分に知られるのであるが、それとて、五年半足らずで終わってしまう。足かけ八年の造園の成果を堪能出来たのは五年半足らずであったのだ。時の最高権力者に到達した吉保の忙しすぎた日常、片時も定着した状況にはなかった六義園の変遷に改めて思いを馳せる次第である。

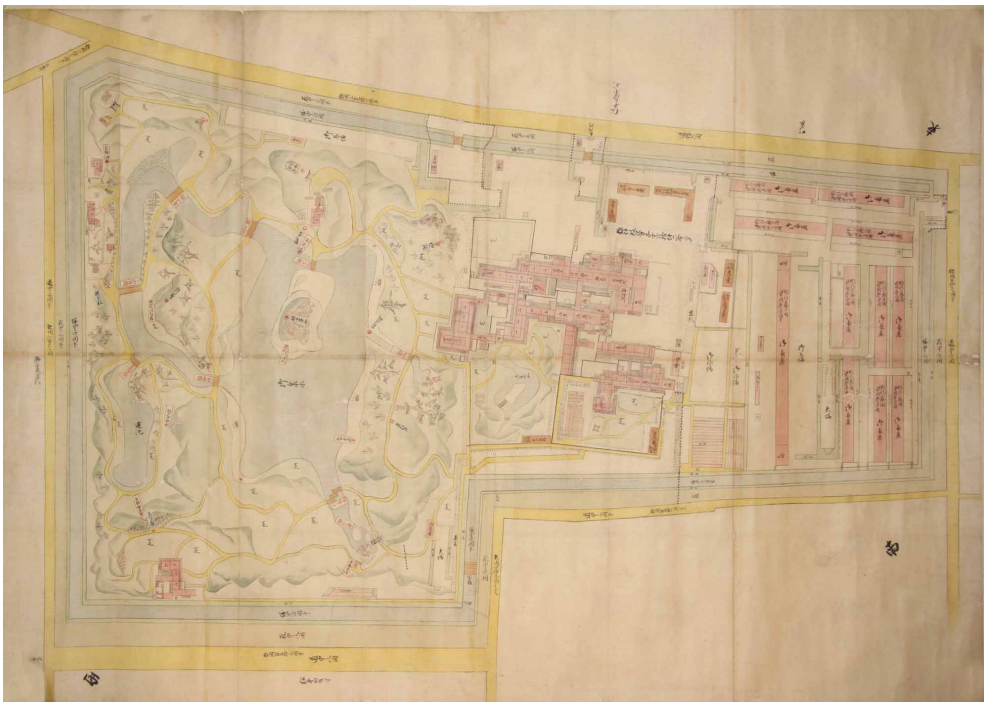
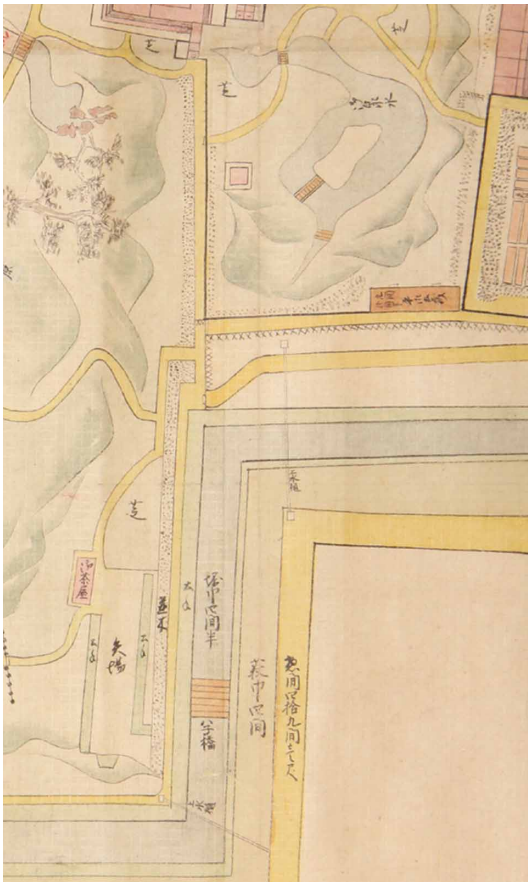
六義園はその後どうなってゆくのか。吉里時代の公用日記「福寿堂年録」を追いながら、報告できる時を待ちたい。

〔追記〕本稿は、淑徳大学学術研究助成費を得ての研究成果の一部であることを述べさせていただきます。なお、調査にあたり心良く資料の閲覧・撮影に応じてくださった柳沢文庫の皆様に、紙面を借りて心よりお礼を申し上げます。

（受理　平成二十二年九月二十五日）

みやかわ　ようこ：淑徳大学　国際コミュニケーション学部　文化コミュニケーション学科　教授

〔絵図Ⅰ〕



〔絵図Ⅱ〕